

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	非がん患者の施設での看取りにおける現状と問題点
演者名	梶本心太郎 沖代奈央 稲井理仁 森田浩嗣 白山宏人
所属	大阪北ホームケアクリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		4

【目的】施設の在宅診療は認知症患者が多く、家族との接触の機会も少ないため、要望把握が困難であり、現状認識・今後の方針の相違が存在することも多い。特に非がん患者における看取りの判断は困難なことが多く、対応が多様とならざるを得ない。今回、施設での非がん患者症例を振り返り、在宅死非がん患者や病院死・施設退所症例との比較、終末期の症状など把握し問題点を検討したので報告する。

【対象】施設入居患者で H21.1～H26.9 の間に死亡退所となった非がん患者症例 33 例と転居による施設退所 9 例

【結果】死亡時平均年齢 87.30±14 歳 現疾患は認知症が多く、次に脳血管疾患・加齢性変化・心不全が多かった。死亡退所症例の平均診療期間は 1270.9 日。転居退所症例は 384.8 日。施設での非がん患者の看取り率は 87.9% で、在宅の非がん患者より高い傾向であった。死因は老衰が最も多く、次に肺炎などの感染症・慢性心不全の急性増悪が多かった。初診開始時の看取り希望場所は、施設を希望が 19 例 病院・未定が 23 例で、その後に希望場所が施設に変更された例は入院歴があるものが多かった。終末期症状は意識障害と軽度せん妄が多く、対応が困難な症例は少なかった。病院死亡のうち 2 例は施設看取りを希望されていたが、血管系疾患からの急変にて救急搬送されていた。

【結論】施設の非がん患者は診療期間が長く、終末期ケアに対する希望が変節することも少なくない。今回の検討では入院を契機として看取り場所を施設に変更した例が多く、概ね穏やかな看取りが可能であった。認知症患者・高齢者が多いことが施設での看取り率に影響していると思われ、急変時の対応が今後の課題であることも示唆された。病状の変化時は本人・家族の気持ちの変化に寄り添い、随時対応を検討していく必要があると思われた。